

The HAPOTOC Manifesto
Our Earth - Our Motherland
The Five Golden Pledges of HAPOTOC
translated into Japanese
by Kenji Wakayama
(Le Libertaire japonais)

H A P O T O C 宣言その他

H A P O T O C 宣言

人類の大多数は圧制という残虐なかかとの下で生きている。このことは、肉体や頭脳をもつて労働するすべての人々の大衆的な搾取と統制、女性の家庭的隷属や女性に対する全面的に制度化された社会的偏見、牢獄（ジャイル）や強制収容所（コンセントレーション・キャンプ）へ数百万の獄中者（ブリズナー）の幽閉、とくに、頽廃した支配諸階級や非道な諸政府による大規模な拷問の使用においてみられるところである。

うべきである。

私たちは重大な事態の発端に位置している。私たちはわずかの時間で私たちの希求にふさわしく世界を全面的に変革する方法と手段を所有している。すでに、私たちは人類の生来的な故国、太陽系のなかにある利用可能な全資源を長期にわたって使用することを予期すること可能である。今でさえ、私たちは、解放された人類が恒星間の宇宙で他の惑星の文明とついに結びつく時代を予見することができるのであり、そこにおいては、今なお私たちの重荷となつてゐる原始的で野蛮な生活状態はずつと以前に放擲されている。

希望と見込みに充ちた偉大で荘厳な未来が私たちの前に横たわる。しかし、私たちの前途は、私たちには監獄（ブリズン）である社会秩序によつて、そして、絶えず私たちを自分たちの体制の獄中者にしておこうとする権力に飢渴した支配諸階級によつて、阻止されている。

彼らの体制の監獄のなかに私たちの未来はなく——価値のない目的のない人生のフラストレーションと精神的苦痛に満ちた奴隷のような無意味な生活だけがある。だが、私たち、地球の圧迫された忍耐強い命令を受けるものは手を取りあつて、団結的な民族国家の獄門（バー）を突破することができる。

これは現代の偉大な歴史的課題である。それは私たち

圧制は社会諸階級、私有財産、男性による女性の支配、命令を与える支配集団と命令を受ける労働大衆、ピラミッド形態の社会組織、国家機関の出現とともに数千年前に中東地方で誕生した。そして、圧制が終息するのは国家／階級社会そのものが終息し、人間による人間の圧制が不可能となるより高度に世界的なリバタリアン社会秩序がそれに代替するときのみである。

国家／階級社会の最高度の形態は今日のファシズムと帝国主義の民族国家である。これは機械のごとき社会体制であつて、そこにおいては生産手段、労働組合、教育、政府は一体となつて団結的な国家資本主義総体に合一されている。この社会機構を動かしているのはテクノクラート、反動的な労働組合の指導者たち、金融制度と産業の統率者、政治家、指導的な経営官僚という統治するアリストクラシーである。

世界のいかなる民族国家をも支配するこの統治するアリストクラシーは圧迫されている人類の主要な敵である。彼らこそが大衆の死と破滅の巨大な兵器廠を建設し、人類を全般的な不幸のきわにまで連れて行つた。彼らこそが私たちを苦悩させるすさまじい経済恐慌や他の諸問題をひき起す。これらの権力を追求する無能なものどもこそが私たちすべての苦痛とフラストレーションの責を負

がすでに実行する強さと能力をもっている課題である。しかし、それは私たち自身によつてのみ引き受けることのできる課題でもある。けれど、私たちだけがフラストレートされた、つまらない、望みもしない現在に私たちを拘禁している多くのくびきから私たち自身を解放することができるのである。

HFI (HAPOTOC・ファミリー・インタナショナル) は、地球の命令を受ける人々の肥沃な土壌に絶えずより深く到達する根をもつた草の根のリバタリアン組織である。私たちは私たち自身と同胞の解放、なによりも、命令を受ける人間の最も圧迫されている部分——全世界の牢獄や強制収容所の獄中者の解放のために活動する。

私たちは、獄中者や監獄は国家／階級社会の不可欠の一部を構成するという信念、それらはこのひどく競争的な、頽廃した、非人間的な社会のジャングルが過去を問題とされるときにのみ存在しなくなるであろうという信念から出発する。そして、獄中者の自由のために活動するにあつて、同時に私たちは、あたりまえの同胞を投獄する国家の権利——とりわけ、現代の真の犯罪者（クリミナル）、すなわちファシストと帝国主義者の政治家とその手先が罰せられずに機能するとき——に挑戦する。

私たちはすべての種類の独裁制と全面的に対決するが、そのなかには誤った権威主義的な「左翼」の独裁制も含まれる。私たちはすべての監獄のトビラを押し開けた。なにかんなく、私たちは現代社会の獄舎（ケイジ）——現代の破壊者、私たちのフラストレーションの原因、私たちにつきまとうすべての邪悪の源泉——から逃走する手段を撃破したい。

HFIの私たちは、世界で最も崇高な大義、人間の自由という大義に生涯をささげようとするすべての人々に、今日——加盟するように要請する。私たちと力をあわせ人間解放の水門を——私たちの大義が適切であり、私たちのリパタリアン・ビジョンが真理であることを絶対的に確信し、私たちが壮大な価値ある目的に成功しつつあると確実に知りながら——開放するにつれて、HFIとともに、あなたは目的の意義、同志の避難所そして希望と意味に満ちた未来を発見するであろう。

※ ※ ※

次はHAPOTOC運動の歌（アンセム）である。スコアがあればそれにふさわしく訳さねばならないと思うが、未入手なので大意を訳しておく。メロディは「アメイジング・グレイス」であるという。おそらくオランダではよく知られているメロディで

あろう。

私たちの地球——私たちの祖国

地球以外に私たちの祖国はない

私たちの同胞は人類である

私たちは自由の呼びかけに答えることを誓う
すべての足かせを解き放せ

すべての規制を終らせよう

搾取もまたそうだ

ひざから起て、起ちあがれ

世界を新たに建設しよう

私たちはすべての人種的つくり話を蔑視する

同胞精神を浸透させよう

人間を拘束する枷を

私たちは新たに攻撃せねばならない

身体と精神を鎖につなかれた人々

あなたたち、目ざめよ

決起せよ 今や

人間を解放するときがきた

コーラス

あなたたち、地球の被圧迫者よ、起ちあがれ

暴君の支配を終らせねばならない

心の奥底から自由にしよう

私たちの地球——私たちの祖国

※ ※ ※

HAPOTOC五つの誓い

1 私は相異なる人種、信条、国籍の人々を私自身と同じ位置にいる人間といつも考える。そして、私はいくつすべての人間を私の同胞、地球全体と太陽系を私の祖国とみなすように努力する。

2 私は、地球の全民衆へ世界の生産物を平等に分配することを促進するために最善をつくす。そして私は、「能力に応じて各人から、必要に応じて各人へ」の原則にもとづく前進した世界経済を創造するために活動する。

3 私は私自身と私の同胞の次の権利をいかなるときにも主張する。

a 思想と言論の自由

b 健全なる身体と精神の発達を可能ならしめる養

育

c 適切な医療看護、汚染物や有害添加物のない食物や水

d 物質的情操的な欲求に調和した衣料と住居

e すぐれた健康に資する快適な物質的環境で生きること

f きわめて建設的な生活をおくる個人の能力を発展させることを目的とした教育

g ものごとを決定する社会の過程において十分かつ直接的な役割を果たすこと

h 搾取、不正、圧迫のないことで特徴づけられ、人間の尊厳を大いに尊重する社会環境で生きること

4 私は、太陽系において、地球のあらゆる動物、植物、大地、空気、水、自然界のすべての他のものは、正當に配慮され処遇されるべきだ、と絶えず主張する。

5 私は世界に対して強い、積極的な、恐れのない態度をとるために全力を尽す。日常生活において、私は肉体的情操的な健康を向上させる実践に献身する。可能なかぎり、私は自己に頼り独立した行動をする能力を発展させる。そして私は、できるだけ多くの時間、精力、才能を世界で最も崇高な大義——人類の解放にささげる。

(以上はすべて試訳としておく。訳に自信のないところ、検討を要する訳語もあるが、文意はこれで通ずると思ふ。他日を期す。

若山健二)

PS

新しい機関誌となつた近着のEXIT(『出口』と訳すべきであろうか。ライヒの文章から選択されている)の第一号(一九七八年一月号)によると、HAPOTOC・SIPのCENTER建設にふさわしい建物がFRIZLANDで見つかり、その資金に充当するため、創刊号は予定の三二頁から一六頁へ縮小せざるをえなかつたという。同誌によると、「新しいセンターは元獄中者の休息所として理想的なものであろう。センターは牧場、放牧牛、農家というこのうえもない絵のような環境におかれ、もよりの町からもほどよく離れている。元獄中者はその経験から回復するにつれて、センターの仕事——センターを修理し拡大することから、文献を刊行する準備をし通常の家庭作業をすることにいたるまで——に参加する機会をもつようになるであらう」。(引用文中に修理とあるのは、このセンターは古い旅館であつたからであらう)。現在、三月一四日にハンブルグ刑務所から釈放される一獄中者のために整備を急いでおり、資

金援助、とりわけ定期的な援助による企画の支援者を求めているところである。

今月初旬のトービン氏からの私信は「……私たちはようやくHAPOTOC・SIPのための家を手に入れました。今や私たちにとはとてもない可能性が開かれているのです……但し、十分な支援があれば、ですけど。現在、私たちはHAPOTOCをコミュニケーションの基盤の上におきはじめています。これによつて私たちは獄中者にもっと多くの支援をすることができるよう。しかし、まず私たちはこのコミュニケーションを軌道にのせねばなりません。……」と述べている。なお、上の創刊号にはオーストリアのコミュニケーション運動で、REICHとFREUDの思想にもとづくAAOを訪問したトービン氏の論文もある。他日、資料を入手し紹介したいと思うが、海外では特定の思想家の思想にもとづくさまざまな運動があり、ブルードンの思想に連なる実践の提唱も最近なされていることは周知の通りである。

小誌、編集同人等にお寄せくださる書信は、内容を判断し、さまざまな配慮をしたうえで、小誌に掲載することを原則としておりますので、公表されたくない書面等はその旨を明記してください。

渡辺政太郎の生涯

加藤善次

まえがき——昨年の十二月十一日の不老者の会で、望月百合子さんから、この稿をいただいた。静岡県富士の加藤善次さんが、この渡辺政太郎を書いて下さつたと聞いて感激した。日本のアナーキズムは、こうした庶民の一人のヒタムキな熱情の上に築かれている。北風会が、どんなに大きな影響を残したか、誰でも知っている。こうした一人だった村木源二郎を誰か書いてくれる人はいないだろうか。

(三浦)

「渡政」のこと

渡辺政太郎について現在容易に見ることのできる資料といえば、近藤憲二の『一無政府主義者の回想』(平凡社)に収められた「渡辺政太郎のこと」という一文であらう。これは近藤が接した晩年の渡辺の思い出をつづつたもので、対象とされた渡辺と書き手近藤の、ともに心優しい人柄が行間ににじみ出ている美しい文章である。

渡辺政太郎という人間を知るには、この短い一文で十分なように私には思える。ここにやや冗長に彼の生涯をまとめたのは、たゞ資料的価値がいくらかでもあろうかと考えてのことである。前もって諒解を請いたい。

(加藤記)

一、出生

渡辺政太郎は明治六年七月一七日、山梨県中巨摩郡松島村(現・敷島町)に生まれた。父庄三、母よね、彼は七人兄弟の長男。家は農業と雑貨商を営み、祖父の代まではかなりの物持ちだったらしいが、病弱な父の頃には貧乏とはいかないまでも暮し向きは傾き始めていた。政太郎は一五才で洗濯屋の丁稚奉公に横須賀へ行き、帰郷後は甲府紡績会社の職工、ついで理髪職人として修業、のち床屋開業と各々数年間ずつ職業を変えている。

二二才の時、渡辺は商業学校入学を希望して上京した。その頃、父はすでに死亡。母親は静岡県富士郡の親戚にあずけてのことだった。(明治四一年五月五日付「東京社会新聞」に東京で活動していた渡辺が姉病氣のため富士郡大宮町に行ったという記事がでてゐるが、恐らく富士郡の親戚とは彼の妹とくゝの嫁ぎ先と思われる。後に述べるように、渡辺が富士郡下で数年間活動するのもそう

した関係からであろう。)

新聞配達などをしながらの予備学校通いの毎日。やがて渡辺青年は人生の大きな壁につきあたったようだ。自分の生き方に悩んだ末、彼はキリスト教青年会館のはん悶引受所に行き、胸中をうちあげ、それを機会にキリスト教に入信する。そして青年会館の紹介で岐阜の濃尾育児院に雇われた。二六才の時である。しかし院長と意見が合わず、数年でやめて再び上京、苦学を続ける。

渡辺が若林ヤヨと出会ったのはこの頃である。ヤヨは彼より二才程年長で、当時東京孤児院(青山孤児育成園?)に勤めていて、やはり熱心なキリスト教徒であった。(二人は従姉弟でもあった。)以後二〇年近くにわたる心優しきクリスチャン夫妻の歩みが始まる。それは底なしの貧乏と権力の弾圧に抗しての、果てしない闘いの日々の始まりでもあった。同じ頃、青年会館で片山潜の演説を聞いた渡辺は社会主義思想にも眼を開いてゆき、やがては社会主義協会の一員として伝道(宣伝)につとめたという。

二、静岡時代

明治三六年頃、渡辺政太郎は静岡県の富士地方に來たようだ。彼は自ら育児院の経営を思いたち、その実現の

ために吉原町の友人、渡辺代吉と協力して富士育児園(現・福祉法人芙蓉会)を設立した。

(「静岡県富士郡誌」(大正二年刊)には、育児院は渡辺代吉一人の手で設立されたところだが、この記述は正確と思われる。ただ、設立にあたっては代吉が中心となり、政太郎が協力したということは考えられる。政太郎と代吉がどういう知り合いであったかは不明。)

富士育児院は静岡県で初めての孤児収容施設であり、しかも肢体不自由児を多く収容したという点でも、注目すべきものがある。(このことは渡辺代吉が肢体不自由者であった事情と関連する。)

渡辺政太郎夫妻には子供はなかったが、二人とも大の子供好きであった。のちに渡辺は「余が社会主義の戦闘線に入りしは、孤児を世の中から無くす為めなり」と述べている。二人の渡辺の協力のもとに出発した富士育児院であったが、意見の喰違ひのため、一年ばかりで政太郎は経営から手を引いてしまったという。(戦前の育児院には孤児を食ひものにする悪質なものが多かったようだ。富士育児院はそうではなかったが、経営は苦しく、孤児達を連れて行商に歩き資金を捻出せざるをえなかった。そうしたやり方に、子供好きの政太郎は耐えられなかったのかもしれない。)

以後の育児院運営は渡辺代吉一人に委ねられた。育児院を出た渡辺は大宮町山本に何反歩かの土地を借り、開墾、農業を始めた。この頃の彼の活動は、明治三七年六月一九日付の週刊「平民新聞」の一隅、地方通信欄に、「社会主義日曜講話会発会式(駿州大宮町)」と題する一文で紹介されている。

「今の世の中で粟粒ほどでも気概のある人は黙して居られないと見え、本月五日の晩、大宮町字山本と云う一寒村に住んで居る我党の一人渡辺政太郎氏が、農業の余暇を以て主義の伝道を為さんと標題の如き会を開くこととなった。それで自分も主義を同うする処から手伝に行った。丁度所有の幻燈を携え、社会画数十枚を映して平生の主義を主張した。当地は彼の有名な富士製紙会社第二工場の近傍なりしかば、当夜集る人々は職工あり、役員あり、小作人あり、児童あり、誠に愉快の集りなりき(吉原町原子基)」

筆者の原子基は当時、富士育児院に勤めていた。青森県弘前出身の原子が育児院に來たのは、恐らく東京で渡辺と出逢い互いに共鳴して、渡辺が富士に赴く際、同行したものと思われる。

三、平民床を始める

さて農業の方は大雨で山腹の畑が流されて、半年ほどで失敗。そのあと渡辺は床屋(平民床)を始める。すでに日露戦争が始まっていたが来る客来る客にキリスト教と社会主義をゴチャ交ぜにした説教や反戦論を熱烈に説いたため、近隣の血氣盛んな連中に国賊視されたようだ。或る晩など、大勢の「襲撃」を受け、店をひっくり返されそうにまでなった。それでも渡辺は平然と宣伝を続けたように、遂に附近の人々の方が根をあげたという。

明治三七年の渡辺の活動を「平民新聞」で見てもよう。八月二十七日、東海道遊説を試みた西川光二郎が吉原町に來た折、渡辺は西川を富士育児院に案内、東座での演説会を準備し、開会の辞をのべている。それから二か月程して、東海道・山陽道へ社会主義伝道行商(宣伝旅行を当時こういった)中の山口義三と小田頼造の二青年が吉原町に到着(一〇月二一日)、二人はさっそく渡辺の天間にあつた平民床を訪れる。二日後、入山瀬の裾野座の演説会で渡辺は開会の辞をのべ、続いて「労働者の覚悟」と題する演説会を行っている。

当時富士地方には、渡辺、原子の他に富士川小学校の教員であつた深尾韶という若き社会主義者がいたが、山口・小田の伝道行商に刺激された三人は、翌明治三八年二月二六日付の「直言」に静岡三人組を結成し伝道行商

を行うとの決意を表明している。渡辺は母親が病気のため、残留することになるが、原子と深尾の二人は三月末、東京に向けて出発した。

四月上旬、準備をととのえた二人は平民社を立ち、甲信伝道行商と称し八王子方面に向うが、四日ほどで官憲の弾圧に会い計画は頓座する。平民社に帰った二人はしばらく北海道に渡り、「平民農場」と名づけた開拓事業を始めるが、これも三年足らずで失敗に終わっている。

原子は平民社滞在中、「直言」に同志渡辺の活動を紹介する「平民床」と題した一文を寄せている。

「富士山の南、鈴川駅から二里の天間という田舎に、仙人の様な床屋がある。『労働者神聖也』の扁額を看板にして、労働者の為めなら八錢の斬髪料を五錢にまけて新聞を呉れて本を貸して、おまけに熱誠な談話をして聴かせる。青年会の演説があれば、彼は雄弁なる弁士として滔々経済を論じ出すのである。富士製紙会社のアーケ燈が輝きそむる夕まぐれ、裾野の道をしよう遙した人は、しばしば彼が『社会主義の檄』を配りつつ、通りすがりの労働者を慰めて居るのを見たであらう。彼は今、それが最愛の妻と共に、有てる総てを社会主義のために捧げて働いている。予は彼が如何にして食ひ得るかを危ぶむのだ。あゝ敬虔なる彼れ富士平民の父よ。彼れが今企てつ

高尾平公のその後

東大の潮見教授が岩波新書に書いた治安維持法の盜作問題で辞職した。われわれの仲間でも、向井孝が先輩たちのためにした誠意と努力が裏切られた例がある。

かく申す私にも不愉快な体験がある。先年作った『久革命への騎士・高尾平兵衛』を買いにきた作家の西野辰吉が、その後『歴史と人物』に「コミンテルンの日本人機関員」を發表した。所が、引用文献に京大助教授の松尾の「忘れられた革命家・高尾平兵衛」(『思想』)を記し、拙著は無視している。私が水沼熊から聞き書きした満洲行きやシベリヤでの反戦活動のくだりは、明らかに盗用されている。

次に、新泉社から出した『墓標なき革命家』は六〇冊買取りだったので、知己にくばった。秋山清は「高尾という人物は全く知らなかったの興味をもった」と葉書をよこした。そして彼は、大杉栄の何トカ(本屋で立読みしたが忘れた)という本を出した。その中で大杉と高尾の論争をかがげ、尤もらしく解説していた。その資料として前記松尾名だけ記して拙著は黙殺した。この生死を高尾としたのは私の独断であって、松尾は全くふれていない。(高尾とは断定しがたいと松尾と小松隆二は

る労働者無料休憩所の一日も早く成功せんことを予は祈りて止まぬのである。彼は正直なる基督信者である。彼の歴史は悲惨に満ちている。彼の弟は今横須賀に在って同志の一人である。

彼とは誰ぞ。深尾留君と予と静岡三人組を作れる渡辺政太郎君其人也。」(明38・4・30)

富士にとどまった渡辺のもとへ東京の孤児育成園から手不足だから援助してほしいとの依頼があり、やがて渡辺夫妻は上京する。明治三十九年、渡辺三四才の時である。

(表紙の2より) (つづく)

本吸う。人影はない。師は煙草や酒はよくないと平凡の自覚Vで教えているけど今日は特別ですよ、と持参のウイスキーをほんの少し墓石にかけ自分も一口飲む。参詣者現わる。二人で小石を敷いた細道と階段を降り、第二会場へ行った。小さな酒宴で話がはずむ。寂聴尼瀬戸内晴美師は出家の動機の一つにトイレットペーパー騒ぎの世相へのプロテストの意味があつたと語る。夢野京太郎こと竹中芳氏と玉川しんめい氏はインデグジュアルアナーキストでどこが悪いと居直る。私としては愚童のようなソシアルアナーキストを考えて欲しいと発言しただけなんだが:

司会は柏木隆法氏。同氏は愚童の研究者で資料発掘の苦勞を語る。A―真相を明きらかにする会Vからは神崎清遠藤城氏等が出席し、市川白弦氏の紹介で出席された女性達は三里塚闘争、毎日新聞の案内をみた学生諸君は自

(11Pへつづく)

つてきた)私の論拠は敢て伏せておく。

このように、有名人の資料名はコケオドカシか勿体づけに記しても、無名人の資料を無断で使うのが、商売人の風習なのだろうか。

ともあれ、高尾が北風会演説会事件のころ、芝浦製作所の人夫をしていたこと。(捕まったとき懷ろにあった原稿の全文もわかつている)高尾が高橋静子を身請けする前、三千円の札束を兄に預けていたこと。関西に行くと安谷寛一らの神戸ロンドン組に泊ったこと。朴烈らと自殺クラブを作ったこと。

荒畑や中村還一らと釜石鉾山争議を見舞に行つたこと。平公の死後、追悼願が作られたこと。などの新たな事実がわかった。将来、平公を再発掘する人があれば、これらのこともりこんでほしい。但し、無名人でも資料名は明示してくれなければ困る。いや、怒る。(萩原)

『久革命への騎士』在庫あり。送料とも千円也。(10Pよりつづく)

己の感慨、僧籍の人達は仏教界の現状をこもごも語り有益だった。愚童師67年目にシャバに引きだされ38才で死んだ温顔に笑みを湛えていたろうか。主催は八黒旗の下にVの白井新平さん。私は8時に退席した。

(文責 はしもと)